
みなみけの日常を淡々と描いたオリジナルです。

霧姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みなみけの日常を淡々と描いたオリジナルです。

【Nコード】

N2660BA

【作者名】

霧姫

【あらすじ】

この物語はみなみけをオリジナルで少し違う、けれど同じような感覚で描いて行きたいと思います。

最初の内はコメディ系が薄いですが、

第3話くらいにはバンバンと出していくので皆さん温かい目でみてください。
ください。

ちよっと場違いな所？での説明失礼しました。

それではみなみけの少し違う世界をお楽しみください

―第1話―新住人登場!

みなみけ原作を元にオリジナルで描きます

この物語はみなみけの日常を淡々と描いたオリジナル作品です。過度な期待はしないでください。

あと、部屋を暗くしすぎないように、画面から離れてみやがってください。

作者さんが誤字脱字、意味不明な発言をたまにしゃがりますので注意してください。

千秋

『それではみなみけスタート!』

夏奈

『なあ春香、今日隣に引越してくる人って確か今日だったよね?』

春香

『ええ、そのはずだけど…こんなに朝早くは流石にないわね。(汗)』

千秋

『そつだぞバカ野郎、まだ朝の7時だ。もう少し大人しくしてろよバカ野郎』

夏奈

『っ!?!?』

千秋

『…どうしたバカ野郎、生憎お前に構ってる暇は無いんだよ。』

夏奈

『朝だけで3回もバカって言われたらそりゃあ怒るでしょっ！』

千秋

『……ジーン。』

夏奈

『な、なんだよ！』

千秋

『どこかバカじゃない所を考えてたんだがいかんせん私は不出来な妹だよ。姉の良い所が一つも見当たらないよ』

夏奈

『なんだとー！』

千秋

『なんだ、やるのか！？』

春香

『止めなさい』二人の頭に軽くチョップ

千秋&夏奈

『痛い。しゅ、しゅめんなさい』

春香

『わかればいいのよ さあ朝食にしましょ？』

千秋

『はい、春香姉さま』

夏奈

『ご飯 ご飯』

春香

『ところで今日引っ越してくる人の名前って知ってる？』

夏奈

『確か、木滝なんとかだったはずだけど…』

春香 『木滝さんねえ…夏奈と同じ年って聞いたから一応クッキーでも焼こうかな？』

夏奈

『賛成っ！』即答

千秋

『お前ただ食べたいだけだろう』

夏奈

『なら千秋は食べないんだ』

千秋

『っ！？い、いや…私は…』

夏奈

『安心しなよ、ちゃんと千秋のぶんも私が食べるからさ』

千秋

『バカ野郎〜！（ふじおか投げ）』

夏奈

『あてっ！』

千秋

『食べるよ！食べるに決まってるだろうバカ野郎！』

春香

『クスツ。なら二人共クツキー作るの手伝ってね』

夏奈

『は〜い！』

千秋

『わかりました、春香姉さま』

春香&夏奈&千秋

『ごちそうさまでした！』

春香

『さて、皿洗い先に済ませるから少し待っててね』

千秋

『春香姉さま、皿洗いお手伝いします』

春香

『ありがとう』

夏奈

『私はクッキー作る時に呼んでくれ。ちょっと漫画呼んでるから。』

春香

『わかった』

ーピンポーンー

夏奈

『はいはい!』

春香

『夏奈のお友達かしら?』

千秋

『春香姉さま、それは無いと思います。昨日は明日の為に早く寝ると言っただけ私に強制的に寝かされましたから』

春香

『あら、そうだったの?』

千秋

『はい』

夏奈

『春香、千秋!聞いて驚け!新しいお隣さんだよ!』

木滝

『お、お邪魔します。今日から隣に住むことになりました木滝です。あ、これ良かったらどうぞ…』

春香

『わざわざすみません。今時間ある？もし良かったらクッキー焼くから食べない？』

木滝

『えっと…まだ部屋が…それに僕一人なので…』

春香

『一人暮らしなの？そうとは知らずにごめんなさいね』

木滝

『いえ、部屋の掃除が終わったら上がらせていただきます』

夏奈

『私手伝ってくるから春香、千秋クッキーの方よろしくっ』

木滝

『え？いえ、一人でも…』

夏奈

『私が女だからって甘く見て貰っちゃあ困るねえ！いいよ、そこま
で言うなら私の力を見せてやろうじゃないか！』
バタバタ。ガチャ

木滝

『……………』

え？ついて行けない……………

千秋

『木滝さん始めまして、私の名前は千秋です。出来ない姉ですみません』

木滝

『え？あ、うん始めまして。』

千秋さん？も苦労してるんだなあ

千秋

『ところで漫画本とかは持ってるんですか？』

木滝

『え？うん結構持つてるよ！』

千秋

『なら早く部屋に行つた方がいいです！』

木滝

『うん。よくわからないけどありがとうございます。』

ぺこりとお辞儀して今日からお世話になる自分の部屋に向かう。

考えてみたら一人暮らしするのは初めてだ。

なんで今日から一人暮らしになるかと言えば簡単な話で親が海外に仕事しに行った。

なんでも2年弱くらいは滞在するらしく母と予定では僕もだっただけど自分から断って一人暮らしになったのだ。

なぜか家ではなく今日から此処にお世話になるのを不思議に思つて聞いたら一軒家より安く、そのほうが周りの人からよくしてもらえ
るからだと言われた。

木滝

『ただいま〜あ?』

なんたる、あのタワーみたいに立ってるのは…
え〜と、漫画本?

夏奈

『あ……こ、これ借りても?』

木滝

『え?それ全部!?!べ、別にいいよ』

夏奈

『ありがとう!ならこれちよつと置いてくるね』
バタバタ

夏奈:ただいま〜!

春香:あら早かったわね…って部屋のかたずけしないで何してるのよ!

千秋:ほんとうにどうしようもないバカ野郎だな

夏奈:ごめんよ〜!今からまた行ってくる!

夏奈

『ごめん、待った?』

木滝は首を横に降って否定した。
なんでだろう…ついて行けない。

――3時間後――

夏奈

『終わったあ〜』

木滝

『ありがとうございました。えっと…』

夏奈

『ん？あ〜、私は南夏奈、よろしく！』

木滝

『夏奈さんですね。よろしくお願いします』

夏奈

『うちに敬語使わなくてもいいよ それより早く私ん家行こ！腹減ったー』

気がつけば時計の針は11時30分を指していた。

木滝

『はい！』

なんだかわからない事だらけだけど、

なんでだろ…とても楽しいって思うのは…

夏奈

『ただいま〜』

木滝

『お邪魔します』

春香

『お疲れ様 おやつの中には早いからお昼にしましょうか』

木滝

『すみません何から何まで…』

春香

『いいのよ、うちはそんなに豪華なのは作れないけど一人で食べるより皆で食べた方が美味しいでしょ？』

木滝

『っ！？は、はい。』

一瞬ドキツとしちゃった。

千秋

『春香姉さま、どうせなら夕飯も一緒に食べたいです』

春香

『そつね、なら午後は買い物しましょうか。』

夏奈

『やった〜！』

木滝

『あ、ありがとうございます』

この後、昼食を食べながら軽く自己紹介をして、13時頃に買い物に行った。

帰ってきたら15時を少し過ぎてたが、おやつの中には変わりない！と夏奈ちゃんが言っつて、僕と千秋ちゃんが便乗し、皆で笑った。春香さんがクッキーを温め直してくれたので作った時と変わらずにできたて感覚で味わえた。

その味と食感はかなり良く、お店に出したら絶対に評判になると思えるほどに美味しいバタークッキーだった。

ちなみに夕飯はちゃんこ鍋でした。

―第2話―温泉のおかげ？（前書き）

観覧ありがとうございます

今の季節は冬ということ、みなみけオリジナル物語でも冬休みです

本来ならクリスマスとお正月の物語を書きたかったのですが、現在時刻などを考慮してこらえました。

今、この小説の日付は2012年1月7日として描いています！

それではみなみけオリジナル物語始まるよ！

―第2話―温泉のおかげ？

―季節は冬―

夏奈

『なあ千秋、冬休みってなんでこんなにも短いんだ？』

千秋

『なんで私にきくんだよ』

夏奈

『だって千秋しかないじゃん』

千秋

『…冬休みが短いのはお前みたいに何もせず、ただただコタツで怠けてるような奴にしない為なんじゃないか？暇なら冬休みの宿題でも勝手にやればいいよ』

夏奈

『千秋…私はね、別に怠けてる訳じゃないんだよ』

千秋

『……………ほう』

夏奈

『いかにして冬休みを楽しく、長く、充実したか感じられるかを考えてるんだよ！』

千秋

『……………』

夏奈

『よし、吉田達も誘って温泉に行こう！』

千秋

『いい加減にしろといいたいが…温泉に行くのは賛成だ』

夏奈

『流石千秋！話が早くて助かるよ。』

千秋

『それで具体的に誰を誘うんだ？』

夏奈

『ん〜日帰りだし、いつものメンバーで誘ってみるか…』

千秋

『…ならマコちゃんも来るのか？』

夏奈

『え？ああ、そうだね、あと木滝洋君も誘おう』

千秋

『藤岡もか？』

夏奈

『？なんであいつも誘わなきゃいけないんだよ』

千秋

『いつものメンバーに入ってるだろう』

夏奈

『……………』

千秋

『明後日に温泉行く予定として…今日事前に電話を入れておけば問題ない。電話は夏奈がかければ一安心だな…』

夏奈

『……………』

千秋

『?どうした。いつもならすぐにでも電話するはずなのに』

夏奈

『千秋…』

千秋

『なんだ?』

夏奈

『仕切るなよ!そこは私の役目だろ!?

何が楽しくていじめるんだよ!』(泣)

千秋

『えっ!?!』

夏奈

『千秋はいつもそうだよ、何が楽しくて私の邪魔をするんだよ!』

千秋

『あ、いや…夏奈?』

夏奈

『一つだけ私の話を全面的に許して欲しい事があるんだけど…それで許してあげる』

千秋

『…任せろ、お前の為ならなんでも受け入れよう』

夏奈

『ほ、ほんとか!?』

千秋

『もちろんだよ! なんとって私の誇れる姉だ』

夏奈

『なら…この前千秋のプリンを食べたのって実は私んだけど許してほしい』

千秋

『許すわけないだろ!』 ふじおか投げ

夏奈

『さっき許してくれるって、あたっ!』

千秋

『前言撤回だよバカ野郎! 何が楽しくて意地悪するんだよバカ野郎!』

夏奈

『ごめんよ〜』

千秋

『許してやるかわりに電話してくれればいいよ!』

夏奈

『ほんとか!? 流石千秋様! 今電話してくるよ』

千秋

『……うう…プリンう』(泣

― 次回も観覧してくれたら嬉しいです ―

―第2話―温泉のおかげ？（前書き）

観覧ありがとうございます

今回は温泉に行く前日のお話です！

感動する物語をイメージしながら書きました。

では、みなみけオリジナル物語スタート！

―第2話―温泉のおかげ？

夏奈

『いよいよ明日温泉だ！』

春香

『ちよつと夏奈、食べ物口に入れながら喋らないでよ』

千秋

『春香姉さまの言うとおりで。それにプリンの特忘れてないぞ』

夏奈

『過ぎた話は水に流し…』

千秋

『黙れよ！バカ野郎』（ふじおか投げ

夏奈

『いてっ！』

春香

『二人共食事中よ。それにプリンのかわりに明日コーヒー牛乳で手を打とうって言ったでしょ？』

夏奈

『いや、昨日は千秋が許してくれるって言ったから…』

千秋

『寝る時にコーヒー牛乳で許してくれ。とか言っただろ…あれは嘘』

か？』

春香

『そうよ、それに私のぶんも無かったし…』

夏奈

『…』

千秋

『お正月過ぎで懐が厚いはずだから問題ないはずだろ？』

夏奈

『…わかったよ。』しよんぼり

千秋

『……………』

春香

『……………あ、そつだ二人共今日買い物に付き合ってくれる？』

夏奈

『え？別にいいけど…』

千秋

『何買うんですか、春香姉さま？』

春香

『ちよっとね 買い物午後から行くからそれまでに支度してね』

千秋&夏奈

『…?』

「買い物中にてー

夏奈

『なあ春香、そろそろ何買うか教えてよ』

春香

『ふふっ、買うまで内緒 今日夕飯どうする?』

千秋

『昨日は鍋だったので今日は豆腐ハンバーグが食べたいです』

夏奈

『賛成』

春香

『なら玉ねぎとか野菜系は家にまだあるから…豆腐買いましょうか』

夏奈

『あ、そういえばシャンプーもきれそうだったけど…』

春香

『え?そうだったの!?』

千秋

『春香姉さま、トイレトペーパーとかもなかったと思います』

春香

『大変、今日買い物に来て良かったわ』

千秋&夏奈

『……………』

春香

『大体こんな所かしらね？』

夏奈

『野菜あるって言いながらよくこんなに買っねえ〜』

春香

『今日安かったんだから仕方ないじゃない。それに卵も買えたし良かったわ』

千秋

『ところで春香姉さま』

春香

『ん？なに？』

千秋

『…いえ、なんでもないです。』

春香

『……………？』

夏奈

『あっ！』

千秋
『!』

春香

『あれは…クスッ。クレープ食べて帰りましょっか』

千秋&夏奈

『やった〜!』

―帰り道―

夏奈

『ところでさ、なんで今日そんなに優しいの?』

千秋

『何かあったんですか春香姉さま?』

春香

『ええ、あったわよ』ふふっ

夏奈『…』

千秋『…』

春香

『二人共手を出して』二人の前に立って言う

夏奈

『じじい』

千秋

『…？』

春香

『はい、これで仲直り』

二人の手と春香の手を合わせて言う

夏奈&千秋

『……………』

春香

『夏奈だつてちゃんと反省してるんでしょ？なら、それで言いと思うの。千秋だつて夏奈の事許してあげたいって本当は思ってるんじゃない？…確かにプリン食べられなかったのはショックだったけどね』

千秋&夏奈

『…うう……う……春香（姉さま）あゝ（泣）』

そう苦笑しながら呟いた顔は、
言葉なんかなくても二人によく伝わった！。

春香

『よしよし…帰ったら夕飯にしましょ？それに…抽選くじで温泉宿泊券ゲットした事だしね』

ー最後まで観覧して頂きありがとうございます！
次も観覧してくれたら嬉しいです ー

―第2話―温泉のおかげ？（前書き）

観覧ありがとうございます

今回は温泉に行く所まで描きました！

キャラはほぼ出しという挑戦的な感じで書きましたがやっぱり難しいですね…

とりあえず前置きはこのくらいにして、それでは！

みなみけオリジナル物語をお楽しみください！

―第2話―温泉のおかげ？

千秋

『夏奈会長、多分皆来たぞ』

夏奈

『ありがとう千秋副会長。よろし！皆、私ん家に来てくれてありがとう！今日は存分に楽しもう！』

皆

『お〜！』

夏奈

『では行く前に春香会計！任せる』

春香

『はい…温泉に向かう前に点呼を取ります。』

『ケイコさん？』

ケイコ

『はい』

春香

『リコさん？』

リコ

『はあ〜い』

春香

『藤岡君?』

藤岡

『はい』

春香

『マコちゃん?』

マコちゃん

『は、はい!』

春香

『吉野ちゃん?』

吉野

『はい』

春香

『内田ちゃん?』

内田

『はい』

春香

『アウスマ君?』

アウスマ

『はい』

春香

『清水先輩？』

清水

『はいはい』

春香

『アキラ君？』

アキラ

『はい』

春香

『ナツキ君？』

ナツキ

『うす』

春香

『ハルオさん？』

ハルオ

『ふむ』

春香

『ピピピピちゃん？』

ピピピ

『はい』

春香

『保坂先輩?』

保坂

『はい!』

春香

『最後に、今週私ん家の隣に引っ越してきた木滝洋君です。自己紹介も兼ねて一言どうぞ』

木滝

『え?は、はい。今週引っ越して来ました木滝洋です。両親は諸事情により不在で一人暮らししてます。よろしくお願いします!』

皆

『よろしく〜』

夏奈

『……………なあ、私知らない人いっぱいいるんだけど…………』

千秋

『私もだよ。春香姉さまとカレーの妖精が知り合いとは…さすが春香姉さま。妖精さんにも認められてるんですね』

清水

『確かに認められてるよ〜「別な意味で」』

夏奈

『あ、清水先輩。もしかしたらもしかしたりします?』

清水

『ああ、ヒトミ達の事ね。もしかしたらもしかしたりするね』

千秋&夏奈

『……………はあ』

春香

『じゃあそろそろ行きましようか』

皆

『はい』

―温泉に移動中―

マコちゃん

『ちよつと夏奈！なんで俺まで呼んだんだよ』ボソッ

夏奈

『なんだ、春香と温泉来たくなかったのか？』

マコちゃん

『いや、そりゃ来たかったけど…』

夏奈

『ならいいじゃん。私だって千秋がマコちゃんを…』

千秋

『私がどうかしたか？』

マコちゃん

『う、ううんなんでもないよ!』

千秋

『そうか…なあマコちゃん』

マコちゃん

『な、なになかな?』

千秋

『今日一緒に背中流ししてくれないか』

マコちゃん

『え?! いや…今日はゆっくりと…』

汗ダラダラ

千秋

『なら洗った後でゆっくり入ろう。じゃあ内田達と話してくるからまたな』

マコちゃん

『え? ちょっと!…ああ』

夏奈

『…ファイト!』

親指を立てて言う

ヒトミ

『ねえねえ、夏奈ちゃんだっけ?』

夏奈

『そっけいあなたはヒトミさん？』

ヒトミ

『うん』

夏奈

『どうしたんですか？』

ヒトミ

『ああ、うん。…あの子、ちょっと可愛いと思って』

夏奈

『ああ、千秋なら私の妹です』

ヒトミ

『千秋ちゃんか、うんありがとう。また何かあったらよろしくね？』

夏奈

『はい』

藤岡

『ねえ南』

夏奈

『ん？どうした藤岡』

藤岡

『うん、さっきケイコちゃんに聞いたんだけどさ、今日って泊まり

がけだったよね?』

夏奈

『そうだけど…まさかお前私が温泉で緩みきつた後に倒そうとしてるな!?!』

威嚇ポーズ

藤岡

『ち、違つよ!ただ僕の所に連絡来なかつたんだけど…』

夏奈

『…もう連絡いつてると思ってたよ!』

藤岡

『まあ別にいいけどね』

リコ

『……………藤岡君とあんなにも親しげに』

ケイコ

『…スカート引つ張らないで欲しいなあ』

春香

『ねえナツキ君、今度また夕飯食べに来てくれない?…最近味落ちてる気がするのよね…夏奈と千秋は気のせいっていうんだけど、あの子達優しいから無理して言ってると思うのよ…』

ナツキ

『…俺でいいならいっすよ』

春香

『ありがとう！じゃあお願いするわ』

ナツキ

『うす。…じゃあ俺はこれで』

春香

『うん』

保坂

『…ナツキ、一体何を話した？』

ナツキ

『…最近味が落ちてる感じがするそうです』

保坂

『…ふむ。スランプってやつか。ナツキ、春香のサポートはお前に任せた。』

ここで助けに出てもインパクトはない。

ならやはり彼女が俺に頼ってくれるまで待つてた方がいい。

例えばこうだ…

—保坂妄想—

春香

『保坂先輩、最近私の料理の味が落ちてるって感じるんですが…これの感想を教えてくださいませんか？』

保坂

『…ふむ。味はいい。むしろこの卵焼きは甘すぎず、かといってし

よっぱい感じはしない。…ダシもふんわりと香りが漂っていい感じだ。それにふわふわとして箸が押し返される…だが、』

春香

『だ、ただ何ですか？』

保坂

『一番は愛情だな。愛情は作った人の味がさらに美味しくしてくれるものだ』

春香

『つ、つまり私に足りないのは愛情？でもどうしたら…』

保坂

『安心しろ春香。私が君に愛という言葉と美味しさを教えよう』

春香

『保坂先輩…私でよければ貰ってくれますか？』

保坂

『当たり前のことを言うな、マイハニー』

春香

『あ…保坂先輩いきなりそんな大胆な…』

保坂

『ここで言えなければ愛は深まらないぞマイハニー』

春香

『そ、そうですよね。ダ、ダーリン』

保坂

『なんだい？ハニー』

春香

『ダーリン』

保坂

『なんだいハニー！』

春香

『ダーリン』

保坂

『ははは、どうしたんだい？ハニー』

春香

『ダーリン』

ー妄想終了ー

保坂

『ふふ、ふはは、はーはっはっ』

ナツキ

『…(汗)』

清水

『あゝナツキ君、気にしなくていいよ。どうせ変な事考えてるだけ』

だから』

ヒトミ

『あ、あの…千秋ちゃん？ですよね』

千秋

『？はい。そうですが』

ヒトミ

『よ、良かったら頭撫でても良いかな？』

千秋

『えっ！？』

ヒトミ

『もう我慢できない！』撫で撫で

千秋

『…はふう』

なんだ？もの凄く力が抜けてくる

でも、頭撫でてもらうのって良いものだな

内田

『あっ！千秋だけずるい。私もして〜』

千秋

『駄目だ、ヒトミ様は渡さないぞ！』

トウマ

『あの千秋が様づけするとは……』

ヒトミ

『〜！可愛い〜』

千秋

『ヒトミ様…これじゃあ親しげ過ぎるな。はっ！お星様だ！………お星様！もしよかったら温泉の時背中と髪を洗ってくれませんか？』

トウマ

『良かったなマコト。背中流ししなくて良くなったぞ』ボソッ

マコちゃん

『うん。だけど、何かに負けた気がする！』

トウマ

『気にするな、それよりアキラ達見ないけどどこ行っただら？』

マコちゃん

『え？トウマのお兄さん達？』

トウマ

『…ま、いつか。どうせそこら辺に居るだろ』

マコちゃん

『…あまり心配しないんだね』

トウマ

『大の大人が迷子になる訳ないし、むしろ心配するだけ無駄だろ？』

マコちゃん

『あ、そっか』

その頃ハルオ達は…

アキラ

『…皆見えないね』

ハルオ

『どっやら皆迷子になったらしいな』

アキラ

『え？僕達が迷子になったんじゃないの!?!?』

―春香達温泉到着―

内田

『やっと着いた〜』

トウマ

『もう歩くのは嫌だぞ』

夏奈

『なあ千秋、ここの温泉なんて言う所?』

千秋

『…看板には朝裏温泉アサウラって書いてるぞ。ほら』

夏奈

『看板ちっちゃいなあ〜全然気づかなかったよ！なのにどうして建物は以上にデカいんだ!?!』

春香

『…とりあえず温泉に入る前に点呼取りましょうか』
『夏奈?』

夏奈

『はい!』

春香

『千秋?』

千秋

『はい』

―以下省略―

最後の方。

春香

『ナツキ君?』

ナツキ

『うす』

春香

『アキラ君？』

『……………』

春香

『あれ？アキラ君は？』

皆

『（ガヤガヤ）』

ナツキ

『春香先輩…ハルオも居ません』

皆

『…え〜〜〜〜！？』

―観覧ありがとうございました―
―次回に続きます―

―第2話―温泉のおかげ？（前書き）

観覧ありがとうございます

今回はちよつと複雑な内容になりましたが、私的には楽しく書かせて貰いました。

見づらい、読みづらい等あると思いますが楽しんでくだされば幸いです

それでは、みなみけオリジナル物語の世界をお楽しみください

―第2話―温泉のおかげ？

春香

『ハルオさん達どこに行つたかわかる人いる？』

皆

『……』

ナツキ

『…兄達の事です。どうせすぐに来ると思います』

トウマ

『そつかな？でもそつなら安心するけど…』

トウマ

『とりあえず探しに行つて皆迷子になったら困るから皆は待つてて』

『！』

夏奈

『待つてて。お前も迷子になったらそれこそ二度手間だよ！』

トウマ

『……』

藤岡

『…じゃあさ、俺達男子が探しに行くから、荷物とか部屋割りお願いしても良いかな？』

夏奈

『……………』

保坂

『ふむ、俺は彼に同感だ』

夏奈

『…わかった』

トウマ

『マコちゃんも一緒に探すの手伝ってくれ』

マコちゃん

『え？お、おう！任せとけ』

木滝

『河川敷当たりで最後見たので多分その後の通りだと思っています』

藤岡

『木滝さんよく見てたね！』

木滝

『いえ、最後列でおとなしくしてたので…』

ナツキ

『木滝さん、ありがとうございます』

藤岡

『じゃあそろそろ行きます』

春香

『…じゃあお願いね？』

男子一同

『はいっ！』

―その頃ハルオ達は―

アキラ

『ねえハルオ兄さん、これって迷子になった所から動かない方が良かったんじゃない？』

ハルオ

『…わかってないな。人は前に進んでいく生き物だ、何もせずいたら人は墮落する。…チャンスは自分で掴むものだぞ！？…だからお前はモテないんだ。』

アキラ

『それとこれとは関係ないだろっ！？第一モテないって言うなよ！』

ハルオ

『…ところでここはどこだ？』

アキラ

『人の話聞けよ！』

―女子 s i d e ―

夏奈

『なあ春香、所で部屋割りどうする?』

春香

『そつねえ…とりあえず中に入ってから決めましょ?』

夏奈

『はい』

店主

『いらっしやい、何名様ですか?』

春香

『え〜と、全員で17人です。』

店主

『そつかい、ちょっと待ってておくれ』

春香

『はい』

千秋

『春香姉さま、さっきの人ずいぶん優しいおばあさんでしたね』

春香

『ええ、そつね』

店主

『はいはい、部屋はほとんど4、5人部屋になるけどいいかい?』

春香

『大丈夫です』

店主

『ならここに部屋の人数かいとくれ』

春香

『ちよつとお時間貰つても良いですか？』

店主

『ああ、構わないよ。何せ最近はお客さんなんて来なくなつたからねえ……』

春香

『え？どうしてですか』

店主

『簡単な話だよ。最近是一段と年季がはいつて、外見がでかいからねえ、お金が高いと勘違いされるんじゃないよ……』

春香

『そつとは知らずに……すみません』

店主

『気にすることはないよ。今日は久々のお客さんだからね、貸切にしといたから温泉代はいらないよ。好きに入るといい』

夏奈

『温泉入り放題！？やったあ〜！』

内田

『ばんざーい』

千秋

『はしゃぐなよ。おばあさんに迷惑だろ
ワクワク』

夏奈

『そういう千秋だってマシユマロ（髪の毛）犬の尻尾みたいに振っ
てるじゃん』

千秋

『これはマシユマロじゃないよバカ野郎〜！』
ふじおか投げ

夏奈

『あてっ！』

ヒトミ

『千秋ちゃん可愛い〜』

千秋

『…はふう』

店主

『いやあ、皆いい子達だね』

春香

『す、すみません』

店主

『なに、気にすることないさね。じゃあ私は失礼するよ。…夕飯は何時頃が良い?』

春香

『皆、どうする?』

内田

『はい!うち、7時頃が良い!』

春香

『皆、7時でも良い?』

女子一同

『賛成!』

店主

『なら、ちょっと過ぎるかもしれないけど7時に持ってくるよ』

春香

『色々ありがとうございます』

店主

『お礼を言うのはむしろ私の方さね』

春香

『今日から一泊お願いします!』

皆

『お願いします!』

店主

『…なんだか照れるねえ』

春香

『じゃあ部屋割りしましょうか』

I 男子 s i d e I

藤岡

『洋君、ここからどっちに行ったらわかる？』

木滝洋

『…わからないや』

保坂

『ナツキ、どっち行ったらわかるか？』

ナツキ

『わかりません』

トウマ

『今まで一本道だったのに別れ道が2つあるけどどっち行く？』

藤岡

『3、3で別れて探そう。』

マコちゃん

『なら俺とトウマ、藤岡でこっち（左の道）探すから保坂さんとナツキさん、木滝さんはそっち（正面の道）お願いしていいかな？』

藤岡

『わかった』

保坂

『了解した』

ナツキ

『うす』

木滝

『うん』

トウマ

『なら待ち合わせは温泉で！じゃ』

そう吐き捨ててマコちゃん、藤岡と共に走りさった。

ナツキ

『…トウマ、一段と遅くなったな』

複雑な気持ちで見送る兄だった…

↓女子s.i.d.e.r

春香

『じゃあ部屋割りの最終確認するわね。』

青竜せいりゅうっていう部屋が私、清水さん、ヒトミ、千秋の4人で、

飛竜ひりゅうの部屋が内田ちゃん、吉野ちゃん、トウマ君、マコちゃん、の

4人で、

金欄きんらんの部屋が、ケイコちゃん、リコちゃん、藤岡君、、洋君、夏奈

の5人で、
銀欄ぎんらんの部屋がアキラ君、ナツキ君、ハルオさん、保坂先輩の4人で
す。』

千秋

『私は賛成です春香姉さま』

夏奈

『仕方ない。これで良いよ』

リコ

『賛成』

清水

『いいんじゃないかな？』

内田

『勿論賛成』

吉野

『私も内田ちゃんと同じ意見です』

ヒトミ

『千秋ちゃんがいるから大賛成』
撫で撫で』

千秋

『お星様、少し待っ…はふい』
うっとり』

春香

『ケイコちゃんは良い?』

ケイコ

『…はい。』

夏奈ちゃんとりコちゃん、どうして二人共スカート引つ張るのかな…
今替えたいつて言わないようにしたわけじゃないよね!?

春香

『なら、良いわね。男子の意見は聞いてないけどとりあえず荷物部屋に持って行きましょ?』

皆

『はい!』

―男子s i d e―

トウマ

『いないなあ〜』

マコちゃん

『トウマのお兄さんって天然なの!?!?』

トウマ

『どうだろう…でもどこかぬけてるのは確かだな』

藤岡

『…こんだけ探して見えないならもう、
あ、洋君から電話だ。もしもし?』

木滝

『あ、藤岡君？今こっちで見つかったよ！』

藤岡

『見つかった？…うんわかった。なら今から戻るね』

木滝

『うん、じゃあまたね！』

藤岡

『じゃあね…二人共無事見つかったって！何でも道の真ん中に突っ立ってたらしいよ』

トウマ

『…よかったあ〜』

マコちゃん

『じゃあ、戻る？走ったから汗ぐとぐとだよ…』

藤岡

『…』

マコちゃん

『え？どうしたの？』

藤岡

『いや、男子の前で胸の襟扇がれたらそりゃ目逸らすでしょ…』

マコちゃん

『…』

藤岡

『安心して！見てないから！』

トウマ

『…ぷっ』

マコちゃん

『待って！俺はおと…』

藤岡

『ごめんなさい…！』

温泉に向かって走り去って行く

マコちゃん

『俺は男なのに…！』

トウマ

『ぷっくく、はははははは…！』

マコちゃん

『笑い事じゃないよ！これじゃあまた温泉に入るのが…はあ』

トウマ

『安心してろって…！どうせ今日は貸切なんだしさ』

マコちゃん

『…っん』

トウマ

『俺達もそろそろ帰ろう！皆待ってるし』

マコちゃん

『そうだね！』

ー全員集合ー

春香

『と、言うことで部屋はいいかな？』

保坂

『俺は構わない』

春香がそう決めたなら…

藤岡

『僕もそれで良いです！』

南と一緒だ

木滝

『はい、構いません』

ナツキ

『いッス』

ハルオ

『ふむ。構わない』

アキラ

『了解』

マコちゃん

『賛成!』

トウマ

『俺も』

春香

『良かった なら荷物は各部屋に持ってったから確認していてね?』

男子一同

『はあ〜い』

夏奈

『私達先に温泉入ったからゆっくり入りなよ!特にマコちゃん
ニヤニヤ』

マコちゃん

『お、おう』

これって女子風呂でって意味だよな?

トウマ〜!

トウマ

『安心しろ、お前が入ってる間見張っとくから』
耳打ちして言う

マコちゃん

『ありがとう』

藤岡

『とりあえず俺も温泉入ろうかな？トウマはどうする？』

トウマ

『俺はまだいいや！』

しまった！俺、藤岡に男子だと思われてるんだ！

藤岡

『そっか、ならアキラ君達もう行ってるから俺も入ってくるね！』

マコちゃん

『トウマも大変だね……』

トウマ

『でも良かったかも……いつもなら強引に連れてかれるからな』

木滝

『あれ？トウマ君って女の子だよね？』

トウマ

『はい』

木滝

『なら今のうちにマコちゃんと一緒に温泉入ったら？』

マコちゃん

『えっ！？』

トウマ

『……………』 赤面

木滝
『?』

マコちゃん

『あ、いや…そうですね』

トウマ

『!』

木滝

『それじゃあ、僕も入ってくるからまたね』

マコちゃん

『はい』

トウマ

『おい、お前本気か!?!』

マコちゃん

『勿論嘘だけど…』

トウマ

『そ、そつだよな…ほっ』

マコちゃん

『それより、早く入ってこないと!ほらトウマ、早く行!』

トウマ

『お、お』

―夕飯―

店主

『待たせたね。一応食堂あるけどどうする?』

春香

『じゃあ、食堂で食べます。今皆呼んできます』

店主

『ゆっくりでいいよ。』

春香

『ありがとうございます』

春香

『食堂で夕飯だから先に行つてて 私もすぐ行くから
各部屋に行つて伝える』

―食堂にて―

店主

『今日は人数が人数だからあまり凝つたのはできなかつたけど、海
鮮料理作つたからゆっくり食べな』

内田

『かに鍋だ〜!』

夏奈

『こつちは鯛の刺身!しかも頭から尻尾まであるよ!~!』

トウマ

『このあさり汁おいしいな!』

マコちゃん

『いくらご飯おいしい!』

千秋

『!サザエってこんなに美味しかったか?』

店主

『気に入ってもらえてよかったよ。なに、おばちゃんの知恵を使っただけさね。いとくが隠し味は秘密だよ』

保坂

『これは…俺にも作れない』

ナツキ

『……………』

春香

『ちょっとナツキ君、そんなに早く食べると喉につまるでしょ!?!』

ナツキ

『ぐっ!げほっげほっ!』

胸が…はだけかけてる!?

春香

『ほら、言ったそばから』

清水

『ねえ春香ちゃん、胸開きかけてるよ?』

春香

『え?.....ナツキ君、』

ナツキ

『う、うす』

春香

『とりあえず先に謝っておくわ』

ナツキ

『うす』

春香

『パチンッ』

皆

『.....』

清水

『ほら、皆夕飯食べよ〜!』

店主

『最近の子達は立ち直りがはやいねえ〜』

皆

『しこ馳走さまでした〜』

店主

『はい、ご粗末さま』

春香

『皿洗い手伝いますか？』

店主

『大丈夫さね。むしろ手伝ってもらったら楽しみが無くなるよ。』

春香

『でも、』

店主

『また来た時は手伝って貰おうかね』

春香

『おばさん…来年皆でまた来ます』

店主

『また楽しみができた、こりゃ死んでられないねえ』

春香

『くすっ』

店主

『ほら、皆待ってるよ？行ってやりな』

春香

『はい…』

―第2話―温泉のおかげ？ (後書き)

ちなみに夕飯の席はこうです。(長テーブル)

春香 ナツキ

清水 保坂

ハルオ アキラ

ヒトミ 千秋

夏奈 藤岡

ケイコ リコ

木滝 吉野

内田 トウマ

マコちゃん

見づらくてすみません。

次回も観覧してきれたら嬉しいです

―第2話―温泉のおかげ？（前書き）

観覧ありがとうございます

今回は各部屋の会話を書かせて頂きました

いつも通りわかりずらい、足りないなどありますが、もしかしたら番外編出す予定なのでそちらで濃い内容が出るかもしれません！

前置きが長くなりましたが、それでは！
みなみけオリジナル物語スタートですっ

―第2話―温泉のおかげ？

―春香達の部屋―

清水

『ねえ春香、来週から三学期始まるでしょ？だからお願いがあるんだけど…』

春香

『部活以外の話なら良いですよ』

清水

『連れないうゝ、せっかくマキ達誘わないでサプライズにしようと思っただのに…』

春香

『マキとアツコが来ないと思ったらそういう事だったんですか？はあ…』

清水

『あ、以外と心配してたんだ』

春香

『そりゃあ清水先輩と保坂先輩が居るのにあの二人が居ないのは誰だって私の立場なら気になりますよ』

清水

『ははっ、そりゃあそうか！一本取られたな…』

春香

『入部ならしません』

清水

『ねえ〜千秋ちゃん、春香に何か言ってくれない？背中を押すような一言をさ〜』

千秋

『……………はふい〜』

ヒトミ

『キヤー！はふい〜だって 可愛いーあう』

清水

『デコピンって案外効果あるんだね？』

ヒトミ

『清水先輩酷いです…』

千秋

『お星様を泣かせたな！？お星様と春香姉さまを困らせるやつは許さな…』

清水

『それ以上言ったらコレ貰う』

千秋

『ふじおかを返せ〜！』

清水

『…はい、返す』

千秋

『…お前何を企んでるんだ』

清水

『何も企んでないよ？ただ春香に部活入って欲しいだけ』

千秋

『春香姉さま、私達の為に部活に入っていないなら私達の心が痛いです…』

春香

『千秋…私は千秋と夏奈がいればそれだけで充分なの』

千秋

『春香姉さま…』

春香

『だからお願い、そんな今にも泣きそうな顔よりも笑顔でいてくれたら私は救われるわ』

ヒトミ

『うう、良い話ツスね〜！清水先輩、今回は見逃してあげてください』

清水

『あっちゃん失敗か…』

―夏奈達の部屋にて―

夏奈

『いやあ〜もう食べられないよ』

藤岡

『かなりおかわりしてたもんね』

リコ

『大丈夫？』

夏奈

『大丈夫じゃないかも〜、ケイコ胃薬くれ』

ケイコ

『ある前提なんだね…あるけど。はい』

木滝

『水なら僕さつき買ってきたのあげる』

夏奈

『二人共気が利くね〜サンキュー』

藤岡

『ねえ南、この後の予定ある？』

夏奈

『ないけど…どうしよう』

リコ

『なら王様ゲームやらない？実は用意してあるんだ〜
王様ゲームで強制的に藤岡君と…』

ケイコ

『なんで私のバックの中にあるのかな？』

藤岡

『王様ゲーム！？やる！今すぐやる！！』
王様になって南と…』

夏奈

『私もやる！！』

ケイコ弄り放題のイベント！
やるしかないでしょ

ケイコ

『…皆から変なオーラ出てる』

夏奈

『ケイコは強制参加』

ケイコ

『えっ？』

内田

『内田、只今参上！』

夏奈

『…お呼びじゃないんだけど』

内田

『ひどいっ!』

マコちゃん

『夏奈!俺もやる!』

トウマ

『面白そうだな』

吉野

『私も…』

木滝

『皆でやった方が楽しいと思って呼んで来ました』

藤岡&リコ

『要らないお世話だ〜!』

ケイコ

『…ありがとう木滝君』

木滝

『ケ、ケイコさん!?!ど、どう致しまして』

やっぱりケイコさんは可愛いな〜

夏奈

『よおーし!なら始めますか リコ、ルール説明よろしく』

リコ

『ルールは簡単、ここにある割り箸の中に一つだけ赤い印のついたのを取った人が王様になって、王様のルールは』

皆

『絶対!!』

夏奈

『よぉーし!なら早速始めよう』

リコ

『ちょっと待って。割り箸足りないから貰ってくる。なんでこうなっただろ。』

皆

『了解』

ケイコ

『どうしてスカート掴みながら歩くかな…』
リコに強制的につれてかれながら

―数時間後―

夏奈

『じゃあ仕切り直して…』

皆

『王様だ〜れだっ!』

マコちゃん

『やった！王様だ！！』

夏奈

『うそ〜、絶対にこれだと思ったのにな〜』

内田

『一番最初に王様になりたかったのに〜』

木滝

『それで、マコちゃんは何を命令するの？』

皆

『……………』

マコちゃん

『…それじゃあ内田とトウマ！春香さん達も呼んで来なさい！そして皆で王様ゲームやるぞお！』

リコ&藤岡

『えっ？』

内田&トウマ

『しょうがないなあ〜』

ー春香達の部屋ー

ーコンコン。

春香

『はい？あら、内田ちゃんにトウマ君どうしたの？』

内田

『うん。今夏奈ちゃん達の部屋で王様ゲームやってね、え〜と』

トウマ

『王様の命令で春香さん達を連れて来て皆でやるって』

春香

『あら、面白そうね。ちょうど暇だったから行くわ 皆はどうする？』

清水

『私も参加する〜面白くなりそうだし』

千秋

『…やってやらないこともないぞ』

ワクワク

ヒトミ

『私もやるけど、ナツキ君達はやるの？』
出来ればナツキ君と…

トウマ

『あ、せっかくだから呼んでこようか？』

内田

『サプライズだね！』

春香

『なら一度ナツキ君達の部屋に行きましょっか』

皆

『はい』

―ナツキ達の部屋―

.....。

保坂

『...ナツキ此処の空気が重く感じるのは気のせいか？』
アキラだかと言う奴は雑誌を真剣に読んでるし、ハルオと言う人は温泉に来てても勉強...
ナツキはテレビを見てる以外何もせずにお茶を飲んでいる。

ナツキ

『気のせいじゃないツスカ？』
いつもこうです。と補足された

保坂

『何かイベント的なものが起こってほしい』
例えばこうだ。

―保坂妄想＋（現実）―

コンコン

保坂

『誰だ？』

春香

『失礼します。あの、今暇ですか？良かったら一緒に王様ゲームでも…』

保坂

『ふむ。暇だから参加してもいい』
『そうそう。王様ゲームか…』

アキラ

『あ、楽しそう』

ハルオ

『私も参加しよう』

ナツキ

『なら俺も…』

保坂

『そうだ。完璧だ…それで俺が王様になったら春…』

春香

『保坂先輩？あの、皆行きましたよ？』

保坂

『？いや、これは現実じゃないはずだ』

春香

『現実ですけど…』

保坂

『なん…だ…と？』

現実？私の妄想の通りに行ったのか？
ならば王様になった暁には春香と…ニヤリ

春香

『あ、あの…？』

保坂

『ご、ごほん。すまない、またせたな。では行く』

春香

『……はい』

―夏奈達の部屋の前で―（小声話）

トウマ

『遅いよー！』

春香

『ごめんね？』

千秋

『春香姉さまと妖精さんは悪くないので気にしないでください』

保坂

『ああ、この言葉で確信した。遂に俺の夢は現実になるのだな！』

皆

『？』

清水

『ぶっくく…』

内田

『と、とりあえず開けるね？』

ガチャ

夏奈

『ずいぶん遅かったじゃん』

内田

『うん。ちよっといろいろあって…』

春香

『お邪魔しまーす』

マコちゃん

『春香さん！どうぞこちらに…って、』

入ってきた人達

『？』

リコ&藤岡&マコちゃん

『増えてるううう！！？』

トウマ

『どうだ？良いサプライズだろ』

夏奈

『よおーし！皆来たことだし、第2回王様ゲーム始めるぞお』

リコ&藤岡&マコちゃん以外
『お〜』

リコ&藤岡&マコちゃん

『俺（私）の夢が…』

夏奈

『ほら、そこ！早く〜』

リコ

『まだ希望はある！』

マコちゃん

『ただ確率が低くなったただけだ！』

藤岡

『きつと王様になれる！』

夏奈

『じゃあ行くよ！王様』

皆

『だ〜れだっ！』

春香

『あ、私だ…』

皆

『またハズした〜』

千秋

『春香姉さま、何を命令するんですか?』

春香

『ん〜そうねえ…じゃあ次に王様になった人に肩もみして貰おうかな?』

保坂+マコちゃん

『!!--』

夏奈

『それだけ?春香はほんとにつまんないな〜』

千秋

『春香姉さまの寛大さをつまらないと言うとは…お前とんでもなくバカ野郎だな』

夏奈

『な、なにを〜!』

春香

『……………それ以上動いたらアイアンクロー入れるわよ?』

千秋&夏奈

『……………(汗)』

清水

『話もすんだし次いつてみよ〜』
『うまくいったら春香を部活に…』

皆

『お〜』

清水

『せ〜の!』

皆

『王様だ〜れだっ!』

春香

『あ、また私?』

保坂+マコちゃん

『チクシヨウツ!』

夏奈

『なんで春香ばっかなんだよ〜』

千秋

『誰かさんと違って日頃の行いがいいからだろ…!』

夏奈

『…次は絶対に王様になつてやる!』

春香

『じゃあ次の願いは、そうねえ〜』

清水

『部活に入るってのはどうかな?』

春香

『…………私に入部をする意見や命令をしない』

清水

『……………』

…終わった。口が滑ったとはいえ、ここまでとは

ヒトミ

『次こそ王様になるッス！じゃあ行くッスよ？』

皆

『王様だ〜れだ！』

吉野

『あ、私だ』

春香

『吉野ちゃん、何をお願いするの？』

吉野

『…じゃあ、マコちゃんと一緒に温泉に入るってのはいいかな？』

マコちゃん + トウマ + 夏奈

『えっ！…？』

吉野

『あ、いやなら別のにするけど…』

マコちゃん

『し、ごめんね？今日はもう温泉はいいかなって（汗）』

吉野

『うっん、気にしないで。なら私は特にないかな？』

皆

『えっ。』

吉野

『他にはないからいいや』

マコちゃん

『……………（汗）疑われた？いや、バレた！？』

トウマ

『じゃ、じゃあ次いつてみよ〜！（汗）』

夏奈

『なあ吉野、お前どうしてマコちゃんと一緒に温泉に入ろうとしたんだ？』

吉野

『？特に理由は無いですけど…女の子同士で入るのは変ですか？』

夏奈さんは何を気にしてるんでしょう？

…謎ですね

夏奈

『そ、そう？そうだよね〜！アハハ』

…吉野って何考えてるか謎だ

トウマ

『じゃあ次だ!』

皆

『王様だ〜れだ!』

清水

『あ、私だ』ニヤニヤ

皆

『……………』

なんでだろう。五感が逃げろって言ってる気がする…………!!

清水

『じゃあ、さっきジュース買って来たんだけど、皆分あるから飲んで』

皆

『え?それだけ!?!』

良かったあ〜

清水

『はい、どうぞ』

皆

『これラベル無いけど…………炭酸?』

清水

『炭酸だけど…………味はちょっと苦いかもね』

千秋

『なんか罰ゲームみたいだな』

夏奈

『……………』

千秋

『ん？どうした夏奈、飲まないのか？』

夏奈

『私はもうちょっと炭酸抜けるまで待つよ。私の舌には刺激が強いから』

これ絶対にアレだよな…

千秋

『そっか、なら先に飲むぞ』

夏奈

『あ、うん』

皆

『……………すうすう』

夏奈

『やっぱりか！！清水先輩これお酒でしょ！？』

清水

『流石夏奈ちゃん。よくわかったね』

夏奈

『……………飲まないとダメですか？』

清水

『YES』

夏奈

『……………くくくくくく……………』

ボタン！すうすう

清水

『あら？皆寝ちゃったか』

保坂

『何故だ！？何故一回も王様になれなかったんだ！？』

清水

『あれ？まだ酔い潰れてないんだ…王様は私で終わったもんね
もう一本「ジューズ」飲む？』

保坂

『…頂こう……………』

ボタン。

清水

『…寝ちゃったか……………私も……………すうすう』

ナツキ

『…おかわりが欲しいな。ん？』
皆寝てるのは何故だ？

―第2話―温泉のおかげ ? (後書き)

意見ご要望がありましたら感想をください。
なるべく取り込んで行きたいと考えてます！

もちろん普通の感想の方や、お気に入りしてくれたら私としてはあ
りがたいですっ (*^_^*)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2660ba/>

みなみけの日常を淡々と描いたオリジナルです。

2012年1月13日00時46分発行